日本英文学会関西支部
第14回大会資料

プログラム
研究発表・シンポジウム要旨

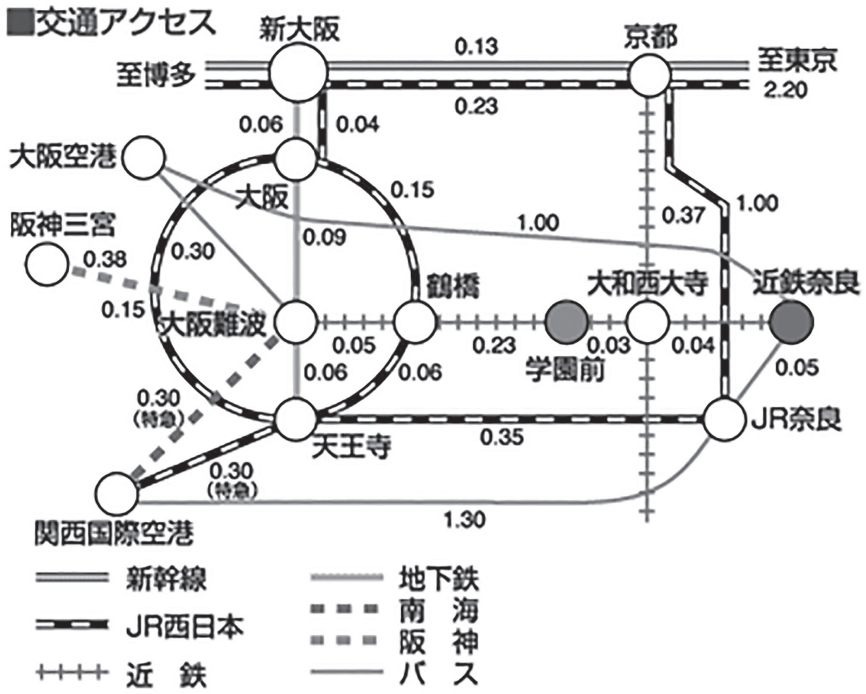
日時：2019年12月8日（日）　12：00より

会場：奈良女子大学（〒630-8506　奈良県奈良市北魚屋西町）

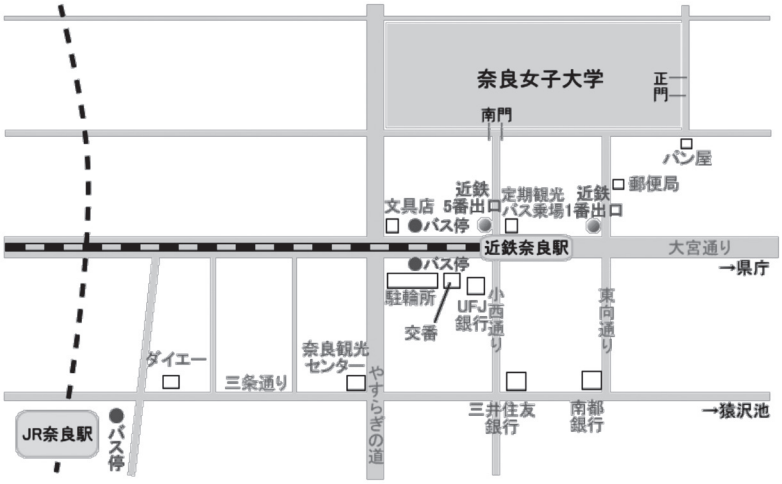
日本英文学会関西支部事務局

〒651－2187　兵庫県神戸市西区学園東町9－1
神戸市外国語大学外国語学部英米学科
E-mail: kansai2@elsj.org

会場（奈良女子大学）までのアクセス

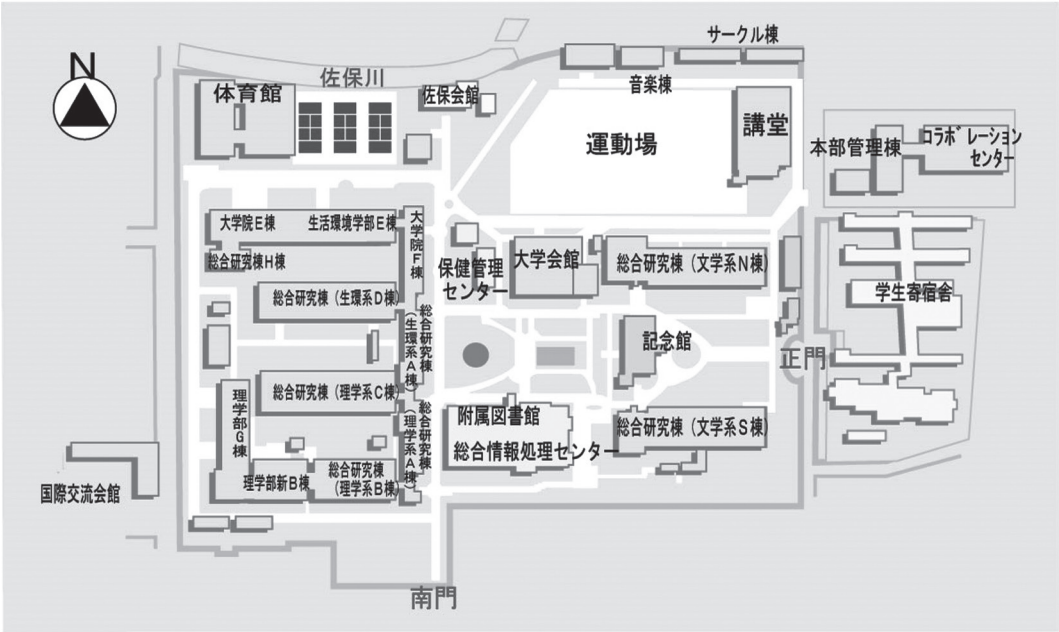


奈良女子大学へは、近鉄奈良駅（1番出口）から徒歩約5分です。
週末は南門が施錠されているため、正門からお越しください。
近鉄奈良駅からの経路は下の地図の通りです。



JR奈良駅よりタクシーをご利用の方は駅出口よりタクシー約7分です。
駐車場はありませんので自家用車でのご来場はご遠慮下さい。

会場構内



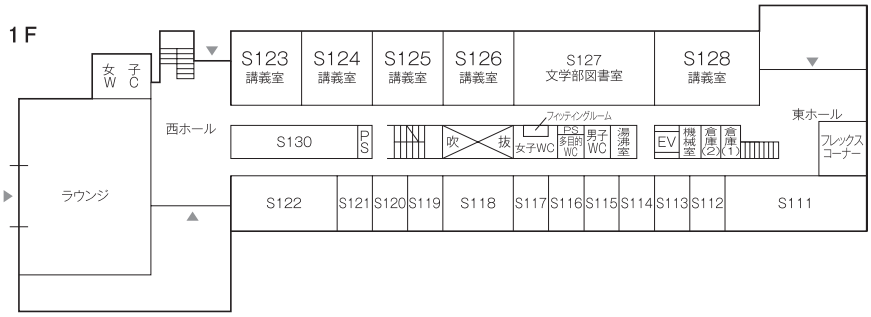
＊ 正門を入り、すぐ左手の総合研究棟（文学系S棟）が発表会場となります。大会受付は、S棟1階西側つきあたりのラウンジに設けております。

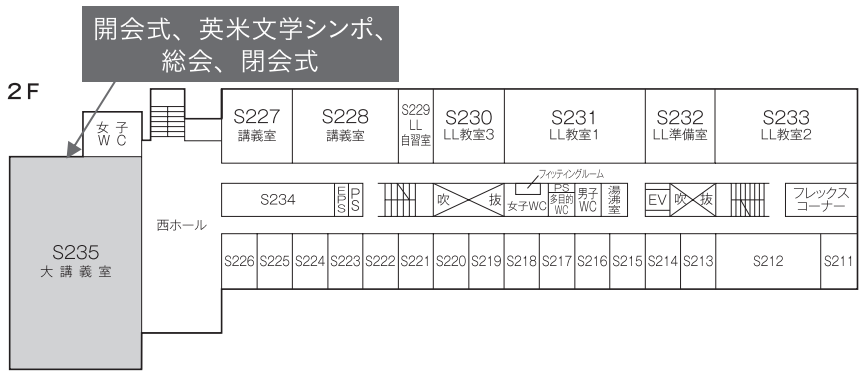
＊ 学内のコープや売店は閉店しております。大学近辺には食事をするところが限られているため、各自、昼食をご持参ください。近鉄奈良駅、JR奈良駅構内および駅前にコンビニや、ベーカリーがあります。

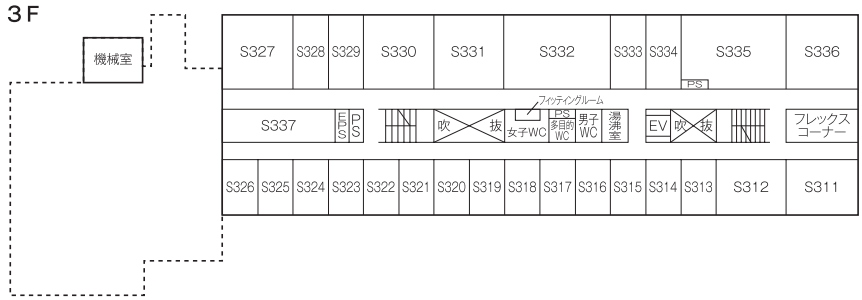
＊ なお本大会より託児サービスを実施することになりました。詳細は9月末ごろに関西支部HPにてお知らせいたします。

教室案内図

総合研究棟（文学系S棟）　〈略号：S〉







懇親会会場

懇親会は総合研究棟1階のラウンジにて開催します。教室案内図をご参照ください。

日本英文学会関西支部第14回大会プログラム

日時：2019年12月8日（日） 12:00より
会場：奈良女子大学（〒630-8506 奈良県奈良市北魚屋西町）

大会受付　11:30より（総合研究棟（文学系S棟）1階ラウンジ）　受付、懇親会費納入

開会式　12:00より（総合研究棟（文学系S棟）2階S235大講義室）
挨拶　日本英文学会関西支部支部長　新　野　　緑

研究発表　第1発表 12:20～13:00　第2発表 13:10～13:50
第3発表 14:00～14:40

第1室（総合研究棟（文学系S棟）2階S 227講義室）

司会　神戸市外国語大学教授　吉　川　朗　子

1. “Tintern Abbey” と “affections”――*Lyrical Ballads*「序文」の詩人論再考
関西学院大学大学院生　菅　原　愛　理

2. 【招待発表】抒情詩における「私」――lyric egotism再考
京都大学教授　桂　山　康　司

第2室（総合研究棟（文学系S棟）2階S 228講義室）

司会　京都大学教授　佐々木　　徹

1. *David Copperfield* における自己を語る試み
神戸大学大学院生　筒　井　瑞　貴

2. 「負けない賭けをする」――トマス・ハーディの悲観主義と倫理学
広島市立大学講師　原　　雅　樹

司会　平安女学院大学助教　木　島　菜菜子

3. 【招待発表】『ペンデニス』における ‘the world’ について
関西学院大学教授　横　内　一　雄

第3室（総合研究棟（文学系S棟）1階S125講義室）

司会　京都ノートルダム女子大学教授　須　川　いずみ

1. ジョイスにおける排泄物のイメージの変遷――『フィネガンズ・ウェイク』と精神分析の思考様式
大阪大学大学院生　宮　原　　駿

司会　関西大学教授　板　倉　厳一郎

2. J・B・プリーストリーの「ポストスクリプツ」――戦時ラジオ放送とビクトリア朝文学
同志社大学教授　川　島　　健

司会　同志社大学教授　藤　井　　光

3. Junot Díaz, *The Brief Wonderous Life of Oscar Wao* における "shit" と排泄物の交錯
大阪大学大学院生　石　倉　綾　乃

第４室（総合研究棟（文学系Ｓ棟）１階S126講義室）

1.（発表なし）
司会　京都先端科学大学教授　古　木　圭　子

2. 過ぎ去った明日――*Something Cloudy, Something Clear* における渇望の回顧
大阪大学非常勤講師　村　上　陽　香

司会　三重大学教授　小　田　敦　子

3. Shakespeare's Man in America: Emerson's Reading of Shakespeare
奈良女子大学外国人教師　Mark　Scott

第５室（総合研究棟（文学系Ｓ棟）１階S128講義室）

司会　神戸大学教授　西　谷　拓　哉

1. Pierreを取り巻く女性達――Herman Melville の *Pierre* における性
関西学院大学大学院生　小　川　恭　佑

司会　関西学院大学教授　塚　田　幸　光

2.「凝集」に取り憑いた「拡散」の亡霊――Don DeLillo の *Zero K* における言語の問題
三重大学特任講師　平　川　　和

司会　近畿大学教授　辻　　和　彦

3.【招待発表】「この男、ブラウン」――Mark Twain, *Letters from Hawaii* における〈もう一人の自分〉の役割
大阪大学教授　里　内　克　巳

第６室（総合研究棟（文学系Ｓ棟）1階S124講義室）

司会　近畿大学教授　吉　田　幸　治

1. 変化を表す *grow* とその補文

大阪工業大学講師　藏　薗　和　也

司会　大阪教育大学教授　寺　田　　寛

2. 英語母語幼児による結果構文の獲得

神戸大学非常勤講師　木　戸　康　人

3. 【招待発表】Labeling of Non-finite Clauses

大阪教育大学准教授　Jason Ginsburg

シンポジウム　15:00～17:20

英米文学部門（総合研究棟（文学系Ｓ棟）2階S235大講義室）

冒険の残滓 ――『ロビンソン・クルーソー』から300年

司会・講師　大阪大学教授　服　部　典　之
講師　山形県立米沢女子短期大学准教授　小　林　亜　希
講師　京都ノートルダム女子大学准教授　大　川　　淳
講師　関西学院大学教授　橋　本　安　央

英語学部門（総合研究棟（文学系Ｓ棟）2階S228講義室）

CP の構築と wh 移動の諸相

司会・講師　近畿大学准教授　平　井　大　輔
講師　関西外国語大学助教　大　宗　　純
講師　愛知大学教授　北　尾　泰　幸

総　会　17:30より（総合研究棟（文学系Ｓ棟）2階S235大講義室）

閉会式　17:50より（総合研究棟（文学系Ｓ棟）2階S235大講義室）

挨拶　日本英文学会関西支部副支部長　水　野　眞　理

懇親会　18:10より（ラウンジ（総合研究棟（文学系Ｓ棟）1階））　会費5,000円

研究発表要旨

第１室（総合研究棟（文学系Ｓ棟）２階S227講義室）

第１発表（12:20より）

司会　神戸市外国語大学教授　　吉　川　朗　子

“Tintern Abbey”と“affections”――*Lyrical Ballads*「序文」の詩人論再考

関西学院大学大学院生　　菅　原　愛　理

*Lyrical Ballads*に付されたWordsworthの「序文」は、同書に収められた作品を念頭に、詩作に関する同書の基本的スタンスと理論的枠組みを記述することであった。たとえば、1802年に加えられた「序文補遺」の中で、Wordsworthは「詩人とは何か」いう問いを提示し、その答えとして、詩人とは人と彼を取り巻く事物を「相互に作用を及ぼし合う（acting and re-acting upon each other）」関係として捉える感性、人と自然が「互いに適応し合う（adapted to each other）」瞬間を捉える想像力に他ならないという趣旨の議論を展開している。

本発表の目的は、Evan Gottliebの指摘する「オブジェクト指向存在論（object-oriented ontology）」との関連をふまえつつ（*Romantic Realities: Speculative Realism and British Romanticism*（2016））、“Lines Written a Few Miles above Tintern Abbey”に書き込まれたWordsworthの「詩人論」を読み解き、作品解釈の新たな可能性を示唆することにある。その際、“Tintern Abbey”に印された“affections”という語に注目して論を進めてみたい。

第２発表（13:10より）

【招待発表】

抒情詩における「私」――lyric egotism再考

京都大学教授　　桂　山　康　司

抒情詩といえば、国家などpublicな題材を扱う叙事詩とは違い、privateな私事を扱うことから、勢い、「私（‘I,’ ‘me,’ etc.）」自身への言及が多くなる。キーツが、‘chameleon poet’として、Shakespeareに代表されるような詩人像を高く評価する一方で、Wordsworthを念頭に‘egotistical sublime’をそれに対置したことはよく知られており、例えば、ロマン派の遺産を引き継ぐヴィクトリア朝にあって、‘egotistical sublime’の弊を回避することがdramatic monologueという新たな抒情詩の形式を生み出す上での原動力の一つであったと主張されるように、egotisticalな抒情詩的特性をいかに緩和するかの方策の探究は、個性を前景化させたロマン派以降の詩作法にあっては、実作者にとって決して看過できない課題であった。今回の発表では、詩作における‘egotism’の在りようを、日本文学の伝統をも考慮に入れながら、俯瞰したい。

第２室（総合研究棟（文学系Ｓ棟）２階Ｓ 228講義室）

第１発表（12:20より）

司会　京都大学教授　　佐々木　　徹

David Copperfield における自己を語る試み

神戸大学大学院生　　筒　井　瑞　貴

Dickensの代表作*David Copperfield*（1849–1850）は作者の投影ともいえる小説家Davidの自伝という体裁を取っているが、本作においてはDavid以外にも多くの登場人物が自分自身について語る場面が用意されており、主人公が他者に関する認識を深め、精神的成長を遂げる上で重要な役割を果たしている。例えば、悪漢Uriah Heepが自身の生い立ちを明かすと、Davidは彼の偽善的な卑下は生得的なものではなく、両親や育った環境に原因があったことを知り、周囲に不貞を疑われていたAnnie Strongが結婚生活を振り返りながら夫に身の潔白を申し立てる場面でも、彼女に関するDavidの判断の誤りが露呈する。このように、自らについて語る登場人物たちを通じてDavidは自己について自らの言葉で表出する必要性を、つまり「自伝」を執筆するという自身の行為の正当性を間接的に補強しているように思われる。本発表は様々な登場人物によってなされる「自己を語る試み」に着目し、それらを自伝としての*David Copperfield*そのものの作品形態に意識を向けさせる自己言及的な装置として分析する。

第２発表（13:10より）

「負けない賭けをする」――トマス・ハーディの悲観主義と倫理学

広島市立大学講師　　原　　雅　樹

ハーディの悲観主義は、現在広く支持されている見解によれば、人間の努力による世界の改善を信じる改善主義と不可分である。彼にとって悲観とは医学的診断と類比的なのであって、人間が悲劇的運命によって翻弄される最悪な状況を描くことは、その改善のための第一歩なのだ。だが、彼の悲観主義にはそうした見解には収まらない側面がある。「悲観主義者の弁明」という小見出しのついた、自伝の中のある一節において、彼は、人生を賭博に見立て、悲観主義とは負けない賭けをするための方法だという。最悪な状況を前提しておくことによって人は失望することなく楽に生きられる、というわけだ。この定義はその場のたんなる思い付きによるものとはいえない。というのは、賭博とその隠喩は、偶然の観念と密接に結びつきながら、彼の作品の核心を成しているからだ。本発表では、賭博とその隠喩に注目しながら、ハーディのいくつかの作品と「悲観主義者の弁明」を読むことによって、彼の悲観主義を新たに描き直したい。

第3発表 (14:00より)

司会　平安女学院大学助教　　木　島　菜菜子

【招待発表】

『ペンデニス』における 'the world' について

関西学院大学教授　　横　内　一　雄

W・M・サッカリーの長編小説『ペンデニス』(1848–50) において、'the world' は重要なキーワードになっている。ペンデニス少佐は「世間通」(a man of the world) と言われるが、彼にとっての「世界」もしくは「世間」は、現実には少数の知己からなる小さな実体であるにもかかわらず、あたかも全世界を包含するかのような強制力を持つ。甥のアーサー・ペンデニスはその「世間」を取り込むことで「社会化」(Moretti によれば教養小説の骨格) を図るが、それによって得るものよりも失うもののほうが大きい。「世間」はまた、ある時には男女の秘めごとを含意するかと思えば、別の時にはそれを排除する力を意味することがある。それはさらに「作者」(あえて語り手とは言わず) と「読者」をつなぐ共通の場でもある。こうした本作における変幻自在、複雑怪奇な 'the world' の概念について、思想史 (ミルの思想圏でもある) と文学論にまたがる視点から考察してみたい。

第3室 (総合研究棟 (文学系S棟) 1階S125講義室)

第1発表 (12:20より)

司会　京都ノートルダム女子大学教授　　須　川　いずみ

ジョイスにおける排泄物のイメージの変遷
——『フィネガンズ・ウェイク』と精神分析の思考様式

大阪大学大学院生　　宮　原　　駿

ジェイムズ・ジョイスの作品群には、排泄物のイメージが溢れており、彼は作家人生を通して排泄物という形象を一貫して使用しているように見える。しかし、こうしたイメージを駆使するジョイスの技巧はそのキャリアの中で変遷していく。初期の詩作品 (「火口からのガス」や「ホーリー・オフィス」) や短篇集『ダブリナーズ』所収の「恩寵」や「土くれ」などにおける諷刺的な糞尿イメージは、「死者たち」や『若い芸術家の肖像』、『ユリシーズ』における実験を経ることとなる。最終的に『ユリシーズ』から『フィネガンズ・ウェイク』へと熟成していく過程においては、同時代の精神分析とその思考様式を共有し、その精神構造を分かち合う。本発表は、ジョイスにおける排泄物のイメージの変遷が『フィネガンズ・ウェイク』へと収斂していくまでを概観し、『ウェイク』が精神分析と思考のパラダイムを共有することを検証することで、作品を同時代の言説空間に位置付ける試みである。

第2発表 (13:10より)

司会　関西大学教授　　板　倉　厳一郎

J・B・プリーストリーの「ポストスクリプツ」――戦時ラジオ放送とビクトリア朝文学

同志社大学教授　　川　島　　健

本発表は、プリーストリー(J. B. Priestley)のBBCラジオ放送「ポストスクリプツ(*Postscripts*)」(1940年6月～10月)を取り上げ、彼が文学を用いて描出する市民的連帯の可能性と問題点について考察する。当時プリーストリーの放送と人気を二分したチャーチル(Winston Churchill)首相の放送は、国民の愛国心を国家への忠誠と軍隊への信頼へと昇華することを目的とした。それにたいしてプリーストリーは、愛国心を国家ではなく前近代的な共同体に求めた。注目すべきは、素朴な市民生活の描写が英国文学の引用と並置されることだ。文学との類比の目的は、市民の連帯を涵養することだったが、それは政治的に無辜とはいえない。本発表は、プリーストリーのチェスタトンの誤読が、彼のビクトリア朝文学の賞賛と市民性への過剰な期待の必然的な結果であることを証明する。その過程によって、プリーストリーの文学的嗜好と戦意高揚の策略の限界を論じる。そして、戦時下のメディアと文学の関係について再考を促すきっかけを提供することを目指す。

第3発表 (14:00より)

司会　同志社大学教授　　藤　井　　光

Junot Díaz, *The Brief Wonderous Life of Oscar Wao*における“shit”と排泄物の交錯

大阪大学大学院生　　石　倉　綾　乃

Junot Díazの長編、*The Brief Wonderous Life of Oscar Wao* (2007)は他のDíaz作品と同様に口語的な語りを採用し、ドミニカ系移民である登場人物たちのアメリカでの生活をスペイン語も交えながら活写している。本作においてひときわ目立つのは“shit”という語の多用である。語り手が反復する“shit”が実際の排泄物を指すことはない。それは単に強意や間投詞であったり、“fuku”なる災禍を指したり、作品や会話の内容を代名詞的に指示していたりする。これは主たる語り手Yunior固有の特徴であって、Lolaに語りが交代する場面ではこの語はなりを潜めている。ところが、家出したLolaは猫の糞置き場である部屋で暮らすことを余儀なくされるのだ。このように固定化された指示対象を持たない“shit”と現実の“shit”が交錯するテクストの上で何が起こるのか、そして主人公Oscarの果たす役割とはいかなるものであるか考察したい。

第4室(総合研究棟(文学系S棟)1階S126講義室)

第1発表 (12:20より)

(発表なし)

第2発表 (13:10より)

司会　京都先端科学大学教授　古　木　圭　子

過ぎ去った明日――*Something Cloudy, Something Clear*における渇望の回顧

大阪大学非常勤講師　村　上　陽　香

Tennessee Williamsは、晩年の作品である*Something Cloudy, Something Clear*について自身の最も自伝的な作品だと評した。作家として成功を収める前の自分をAugustに投影し、1940年の9月を描いた作品である。

本作タイトルが示す二重露出は相反する様々なものの重なりを表し、それは1940年と1980年の二つの時間軸の同時共存という特徴的な作品構造に最も顕著である。前者では登場人物が今日を生き延びる術を探りながら未来を待ち侘び、後者ではAugustがClareとともにそんな日々を過ぎ去ったものとして回顧する。

Augustは作品の上演のために妥協を迫られる弱者の立場にありながら、Kipの明日への保障を盾に彼を領有しうる強者でもある。しかし、AugustがKipに対して抱くのは性的欲望だけではなく、彼が若い頃から待ち続ける「パレード」として表現される別の渇望でもあるように思われる。本発表ではAugustや、未来へ不安と希望の眼差しを向けた人物たちの抱いていた渇望の正体を考察し、本作の特徴的な作品構造の持つ効果について考えたい。

第3発表 (14:00より)

司会　三重大学教授　小　田　敦　子

Shakespeare's Man in America: Emerson's Reading of Shakespeare

奈良女子大学外国人教師　Mark Scott

"It is only by doing without Shakespeare," wrote Ralph Waldo Emerson in 1841, "that we can do without his book. Be Shakespeare, & we shall value it no longer." Emerson had some very strange, provocative ideas about Shakespeare, ideas that haven't occasioned much serious analysis by his critics. There are some obvious reasons why they haven't. Emerson never wrote a play. He wasn't a dramatist. In fact, of the canonical writers in 19th-century American literature, not one was a dramatist. But no writer, unless it was Milton, provoked and informed Emerson, turned on and stimulated him, more than Shakespeare did. In this paper, I hope to show how Emerson, in his essays and journals, impersonated Shakespeare—how he did "be" him. In that act, Emerson developed a philosophy of the dramatic imagination with significant consequences for American culture, but not, I think, as has been argued over the last thirty years, for Jamesian pragmatism. In Shakespeare's "brightest heaven of invention," Emerson remained a Protestant and a romantic for whom Shakespeare's sonnets and plays enacted Idealism. How they did so is the story I want to tell in my paper.

第５室（総合研究棟（文学系Ｓ棟）１階Ｓ128講義室）

第１発表（12:20より）

司会　神戸大学教授　　西　谷　拓　哉

Pierreを取り巻く女性達――Herman Melvilleの*Pierre*における性

関西学院大学大学院生　　小　川　恭　佑

ハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819–91）は、その作家人生の前半期において『ホワイト・ジャケット』（*White-Jacket*, 1850）や『白鯨』（*Moby-Dick*, 1851）などの長編小説を出版したが、それらはいずれも海上を舞台として男性を中心に物語が展開する。しかし、上記の作品に続いて出版された『ピエール』（*Pierre*, 1852）では、作風を一変し、陸上を舞台とした男女の関係が作品の主題となる。この変化が災いしてか、『ピエール』は酷評されることとなった。

本発表では、このような背景を持つ『ピエール』に見られる女性性、男性性の表象の問題を考察する。具体的には、男性であるピエール（Pierre）に付随する女性性に着目し、男性性と女性性との間の揺れを解釈するとともに、ピエールを取り巻く女性、グレンディニング夫人（Mrs. Glendinning）、ルーシー（Lucy）、イザベル（Isabel）の関係性を整理する。最終的に、女性表象と凄惨なエンディングとの接続を明確化し、当時、『ピエール』が酷評された原因を、性の視点から明らかにする。

第２発表（13:10より）

司会　関西学院大学教授　　塚　田　幸　光

「凝集」に取り憑いた「拡散」の亡霊――Don DeLilloの*Zero K*における言語の問題

三重大学特任講師　　平　川　　和

Don DeLilloの*Zero K*（2016）では、あらゆる叡智を凝集させたConvergenceと呼ばれる人体冷凍保存施設を舞台に「死後の生」についての思索が展開される。未来において冷凍保存から目覚めた人間は、発達した科学技術によって冷凍前よりも進化した肉体を持つ新人類となることが期される。肉体だけでなく、言語も新たな次元へと飛躍する。新人類の話す言語は、直喩、隠喩、類推といった修辞法から解放され、「透明な窓」として意思疎通の機能を果たす。そのような言語では、言葉の意味は拡散（diverge）することなく１つの意味へと収斂（converge）していくだろう。一方でConvergenceという施設自体は、内部に抽象芸術が散りばめられ、余剰なデザイン性を纏っている。語り手Jeffはその謎めいたデザインになんとか言葉を宛がい、意味を問い続けるが、彼の問いは１つの答えに収斂することなく、むしろ拡散していく。本発表ではDeLilloの言語観を手掛かりに、Convergence（凝集）に取り憑いたdivergence（拡散）の亡霊について検討する。

第3発表 (14:00より)

司会　近畿大学教授　　辻　　和　彦

【招待発表】

「この男、ブラウン」
——Mark Twain, *Letters from Hawaii* における〈もう一人の自分〉の役割

大阪大学教授　　里　内　克　巳

南北戦争終結から間もない1866年、Mark Twainは特派員としてSandwich Islandsと呼ばれていたハワイに赴き、その地の産業や先住民の暮らしぶり、歴史や社会制度などについて報告するユーモラスな通信書簡をアメリカ本国に書き送った。一冊の書物としての統一性を欠き、合衆国のナショナリズムに加担する一面があるなどの理由から、『ハワイ通信』の評価は決して高くはない。本発表では、登場人物としてのトウェインの相棒Mr. Brownに注目し、ハワイ先住民や植民地主義への複雑な態度表明、そしてロマンチックで感傷的な文学スタイルに対する揶揄が、この架空の人物を通してなされる様をつぶさに検討する。また、登場人物としてのトウェインと、その傍らにいながら奇妙にも身体性を欠き、人種的には有色であって有色でないブラウン氏は、互いに結合双子のような存在である。*The Adventures of Tom Sawyer* (1876年) や、最晩年の *Which Was It ?* (1899–1906年) に顕著に認められる〈自分のなかに潜むもう一人の自分〉という主題の萌芽を、この最初期のトウェイン作品に見出したい。

第6室 (総合研究棟 (文学系S棟) 1階S124講義室)

第1発表 (12:20より)

司会　近畿大学教授　　吉　田　幸　治

変化を表す *grow* とその補文

大阪工業大学講師　　藏　薗　和　也

動詞 *grow* は *cold*, *faint*, *fat*, *dark*, *loud*, *thin*, *calm*, *old*, *tall* などの形容詞を主にとり、人・物・事がある状態になることを表す (ジーニアス英和辞典　第5版) とされている。また、*grow cooler*, *grow more content* (Quirk et al., 1985: 1174) のように直後に形容詞の比較級をとって自然の漸次的変化を表すという。一方、同じ *grow* が *to be* をとる場合にどのような形容詞をとるかについては説明が与えられていない。本発表では、「*grow* + 形容詞」は単に「*grow to be* + 形容詞」の *to be* が省略された形とは考えず、*grow* と *grow to be* がどのような形容詞をとるかを含めた統語的特徴を比較し、統語的特徴の違いからそれぞれの意味の相違を説明する。

第2発表 （13:10より）

司会　大阪教育大学教授　　寺　田　　寛

英語母語幼児による結果構文の獲得

神戸大学非常勤講師　　木　戸　康　人

本発表では、真偽値判断課題を行うことで英語を母語とする子どもがいつから結果構文を理解しているのかを明らかにすることを試みる。対象は英語を母語とする子ども20人（（3.05−5;07）平均4.03歳）である。調査の結果、結果構文の真偽に対する子どもの回答は、統計的に有意であった（Wilcoxon Signed-Ranks $W=210$, $n_{s/r}=20$, two-tailed $p=.0001$）。また20人中18人は8例中7例以上、期待される回答をしていた（directional　$p<.05$）。次に、CHILDESを使用して子どもの周りの大人が子どもに結果構文を使っているかどうかを調査した。その結果、おおよそ10万の発話の中で約4回しか結果構文が使われていなかった。この調査結果は、子どもがインプットを基にして結果構文を獲得していないことを示唆している。考えられるインプット以外の可能性の1つはSnyder（1995, 2001）によって提案された複合パラメータである。本発表での調査結果は子どもがパラメータによる母語獲得を行っている証拠を示すことはできていないが、その方向性がありうることを示唆するものである。

第3発表 （14:00より）

【招待発表】

Labeling of Non-finite Clauses

大阪教育大学准教授　　Jason Ginsburg

Given Chomsky's labeling theory (Chomsky 2013, 2015), all syntactic objects must be labeled for a derivation to converge. Chomsky argues that the English finite T is too weak to label by itself, but it can be labeled by sharing features with a subject. In *John read the book*, T and the subject *John* undergo phi-feature agreement that allows labeling. This analysis, however, raises problems for non-finite T, which does not appear to undergo full phi-feature agreement (cf. Chomsky 2001). In *they expected John to win*, the non-finite T, *to*, does not show agreement with the subject. Following Ginsburg (2016), I assume that unchecked phi-features (uPhi) of the matrix phase head v* are inherited by the non-finite T, so T and v* have unified uPhi. When v* Agrees with the embedded clause subject, the unified uPhi on T are checked, thus strengthening non-finite T so that it can label. In this talk, I extend this analysis to clausal gerunds (e.g., *Sue prefers John swimming* and *Bob tried swimming* (Pires 2006)), which are a type of non-finite clause (cf. Milsark 1988) in which the gerundival T head does not appear to undergo (full) phi-feature agreement with a subject, thus raising problems for labeling. While examining the fine details of the structures of clausal gerunds, I demonstrate how feature inheritance and strengthening account for how they are labeled.

シンポジウム要旨

英米文学部門（総合研究棟（文学系Ｓ棟）２階S235大講義室）

冒険の残滓――『ロビンソン・クルーソー』から300年

司会・講師　大阪大学教授　服部典之
講師　山形県立米沢女子短期大学准教授　小林亜希
講師　京都ノートルダム女子大学准教授　大川淳
講師　関西学院大学教授　橋本安央

シンポジウムのねらい

人魚のラグーンに取り残され、満ちる水に飲み込まれようとする瞬間、ピーター・パンは言う。“To die will be an awfully big adventure.” 1791年、英国船バウンティ号の反乱者の逮捕に成功したパンドラ号がグレート・バリア・リーフで座礁して沈んでいくとき、溺死しようとする船員たちはこの上もなく美しい極彩色の珊瑚礁の広がりと熱帯魚の群れを見たに違いない。そのパンドラ号はほぼ原型のまま珊瑚礁の中で発見され、引き揚げられ復元されつつあるが、まさにこの帆船は「冒険の残滓」を体現していると言えよう。冒険の美と死は不可分である。『ロビンソン・クルーソー』出版の1719年から300年経つ今、美しくも死を招来する冒険、もしくは冒険譚を語り論ずることは可能なのだろうか。あるいは地球上の未知の領域が激減したとおぼしき時代にあって、冒険的精神の「残滓」は、内向する者の美と死をめぐる想念に、いかなる影響を及ぼしうるのか。我々は「冒険の残滓」に懐旧の想いを馳せることで、新たな知の海への旅立ちを模索したいと思う。

浜辺の想念――クルーソーの垂直的冒険

大阪大学教授　服部典之

18世紀英国の孤児小説では多くの捨て子ヒーローは物語の最後で親との再会を果たす。ところが死を賭した冒険に出立する子供たちは親に会うことは絶えてない。冒険小説はいわば子供による「捨て親物語」だと言えるだろう。親を捨てた少年は難破して波に飲み込まれる恐怖を経験することになる。浜に上がるか波に呑まれるか、存在論的垂直の冒険に飛び込むのだ。原作のクルーソーがカリブ島の浜辺で溺死しかける時、彼は美しい珊瑚礁に気づくことはないが、*The Robinson Crusoe Story*（Martin Green: 1990）が議論する後世の冒険譚登場人物の多くは太平洋の美しい珊瑚礁を見ながらクルーソーを想起した。その結果クルーソーは珊瑚礁の海と格闘したものと想像されるようになり、彼は美と死を浮き沈みの垂直的運動の中で冒険することになった。18世紀終わり1789年に起こったバウンティ号の反乱という事件は事実であるとともに、様々なフィクションを生みだし、クルーソー的物語を振り返る考察のためには絶好の出港地となるだろう。反乱者を鎮圧したパンドラ号が座礁し沈没するという事件は、クルーソー的物語の罪とロマンと美と死への想念を如実に映しており、これを小説としたNordhoff & Hallの*Mutiny on the Bounty*（1932）を手がかりに沈没した冒険の残滓を捜索してみたい。

ヘテロトピアのロビンソン――反ロビンソン物語における〈終り〉の意識

山形県立米沢女子短期大学准教授　小　林　亜　希

Lord of the Flies（1954）を嚆矢とするゴールディングの諸テクストは、絶えず先行テクストのイデオロギーと物語構造を転覆させることが企図されているように思われる。Martin Greenが*Lord of the Flies*（1954）と*Pincher Martin*（1956）に「ロビンソン物語全体に対する執念深い敵意」を読み取り（Green: 1990）、それらを「反ロビンソン物語」と見做したのも故なきことではない。*The Coral Island*（1858）のパロディでもある*Lord of the Flies*のエンディングは、海軍士官の登場によって、子供たちだけの島が大人たちの戦地の一部に過ぎなかったことを暗示するものであり、*Pincher Martin*のエンディングは、孤岩におけるマーティンの生存に疑義を付すことで、物語内容を自己瓦解させてしまうかのような構造を有している。いずれも物語の終りに、外部なき世界における冒険の不可能性が強調されている。だが、*Rites of Passage*（1980）では、冒険の舞台は「島」ではなく、対蹠地オーストラリアへと向かう「船」の上である。「現実に存在しながらも絶対的に異なった場所」（Foucault: 1986）であるヘテロトピアにおいて冒険は可能だろうか。ロビンソン物語の〈終り〉について考えてみたい。

「下書きの下書き」――メルヴィル文学とスティグマの表象

京都ノートルダム女子大学准教授　大　川　　淳

イシュマエルは「捕鯨船は我がイェール大学であり、我がハーバード大学なのだ」という。まるで作者の声がこだましているかのようだ。1841年、捕鯨船に乗り込んだメルヴィルは、捕鯨航海という、死がつねに隙をうかがう過酷極まる環境の中で、人知を寄せつけない海の崇高と深淵に陶酔した。彼の想像力の精髄は、海とのなまの接触によって涵養されたのである。

我々が読むのは、白紙の上に文字を刻まれた彼の冒険の陰鬱な残滓でもある。そして、それは、ときにトラウマとして、あるいはスティグマとして、作品内で表出される。*Moby-Dick*（1851）において、白鯨への復讐の想念を体現するエイハブの額に刻み込まれた皺が、海図に引かれた線と符合するように、メルヴィルの冒険の残滓は、文字として刻み込まれたスティグマとして浮き彫りになる。それは、眼前に瞬時に閃くものの、決して全貌を明かさぬ幻影を、紙に刻まんとする作者の欲望と苦悩の告白でもあるかもしれない。そこで本発表では、メルヴィル文学における「身体」と「テクスト」、あるいは「残滓」と「書くという行為」との間に見られる接続性と、そこから示唆されるものについて考察したい。

この小さな、小さな世界に

関西学院大学教授　橋　本　安　央

世界地図上の空白がほぼ埋め尽くされ、グーグルマップが未知の空間に至る擬似的体験を提供してくれる今日にあって、冒険的精神の存立は、きわめて厳しくなっている。あるいはそれは、地球上のどこかではなく、見果てぬ先の宇宙に向かっているのかもしれぬ。

Raymond Carverは、アメリカにおけるアポロ計画や、政治的文化的〈冒険〉の季節が終焉を迎えたのちに登場した、きわめて内向的な小説家、詩人である。公から私へ、という引きこもりは、1970年代のアメリカについてよくいわれることだが、カーヴァーにはむろん、冒険的精神は欠片もなく、その作品の中では、ワーキングプアや失業者、アルコール中毒者を中心とした、チェーホフのごとき日常の小さな世界が描かれる。だが、ときにそこにも、ヴェトナム戦争やヒッピー

たちの残像が入りこんできて、人物たちは心を掻き乱される。そうしてさらに内向きになるところがある。

ユートピアを想定できないために、ディストピアが存在しようもない現代における日常を、いかに生き抜くことができるのか。21世紀のこの島国にもあてはまる、こうした主題を、カーヴァーの作品を手がかりに、小さく、細かく、考えてみたい。

英語学部門（総合研究棟（文学系Ｓ棟）2階S228講義室）

CPの構築とwh移動の諸相

司会・講師　近畿大学准教授　平井大輔
講師　関西外国語大学助教　大宗純
講師　愛知大学教授　北尾泰幸

シンポジウムのねらい

自然言語にはwh句を含む疑問文があるが、そのwh句の統語的、意味的振る舞いに関しては言語によって違いがある。生成文法では、wh疑問文だけでなく関係節などにも、顕在的あるいは非顕在的なwh句の移動が関与していると分析されており、 その移動がいかにして起こるのかについては長きにわたって議論の中心となっている。特に、生成文法理論の初期の頃は、英語のwh句の移動は単純な構造変更規則で捉えられていたが、理論的進展を経て、近年の枠組みではラベル付けの要請に基づく移動が提案されている。本シンポジウムでは、3人の講師がin-situ-wh疑問文やスルーシング、日本語における関係節などの諸現象を考察しながら、wh疑問文の形成と節の構造について考え、各現象の派生方法について議論する。

併合の自由適用とwh疑問文のラベル付けについて

関西外国語大学助教　大宗純

Chomsky（2013, 2015）では、ラベルは第三要因に起因する最小検索によって決定されると仮定された上で、併合は外的・内的に関わらず、自由に適用可能であると主張されている。この主張の下、Epstein et al.（2017, 2018, 2019）は、probe-goal Agreeを廃止し、一致はラベル付けと同様の最小検索によって行われる可能性を模索している。彼らによると、一致とは、未与値素性に対応する内的・語彙的に値を保持する素性との関係が、最小検索によって共有されることである。すなわち、指定部・主要部関係によって一致が行われるのである。本発表では、この考えの下、英語や日本語のwh疑問文のラベル付けについて再考する。特に、英語の問い返し疑問文や日本語のwh疑問文のようなwh-in-situ疑問文はどのような構造を持っていて、どのようにラベル付けや一致が行われるのかについて提案・分析を行う。また、その分析を援用し、多重wh疑問文のラベル付けがどのように行われているかについても議論する。

関係節における演算子移動と再述代名詞の生起について

愛知大学教授　北　尾　泰　幸

英語の場合、関係節の派生に統語的移動が含まれていることは疑問の余地がないが、日本語関係節については、関係節主要部とその空所が局所的な関係にない形でも関係節が形成される「長距離依存性」を見せることから、その派生に統語的移動が関与していないという議論も多い。本発表では、弱交差現象、再構築効果・連結性、寄生空所の生起可能性、左枝分かれ制約の効果、非適正移動などの統語特性をもとに日本語関係節を詳細に分析したうえで、同関係節の派生には統語的移動が含まれていることを明らかにするとともに、その移動の特性は、とりわけ関係節主要部とそのθ位置が局所的な関係にある場合は主要部上昇移動であることを明らかにする。また、同関係節の長距離依存性については、演算子移動の際に行われる再述代名詞残留が関与していることを理論的に明らかにし、局所的な関係節派生と非局所的な関係節派生の違いを統語的に精査する。

Q形態素によるwh句の束縛と非構成素削除について

近畿大学准教授　平　井　大　輔

Ross（1969）以来、間接疑問文削除の派生について、様々な分析が提案されている。英語の場合、削除操作は構成素に適用されるという考えの下、wh句は統語的島の条件の違反をしながらもCP位置に移動し、違反した部分が音声的に削除されると文法的な文が派生されるという分析がある。しかしながら、wh移動が派生的に適用されるのであれば、どのようにその移動が可能となっているのかが、依然明らかではない。本発表では、Baker（1970）のQ形態素を援用し、Q形態素はC主要部に位置し、英語のようなwh句移動を有す言語では、wh句と音声的に隣接することを要求すると仮定する。その上で、間接疑問文削除におけるwh句はT主要部のEPP素性など他の要請がない限り元位置に留まり、削除操作によってQ形態素との音声的隣接性を満たし、Q形態素の長距離束縛により解釈が与えられ正しく派生されることを提案する。この分析により、削除操作が非構成素に提要される可能性を考える。

大会準備委員

委 員 長：　勝山　貴之（同志社大学）
副委員長：　団野　恵美子（大阪芸術大学）

英文学部門委員：
　木下　由紀子（神戸女子大学）　　小島　基洋（京都大学）

米文学部門委員：
　竹井　智子（京都工芸繊維大学）　　松岡　信哉（龍谷大学）　　森本　道孝（大阪大学）

英語学部門委員：
　寺田　寛（大阪教育大学）　　吉田　幸治（近畿大学）

開催校委員：
　齊藤　美和（奈良女子大学）

（五十音順、敬称略）
（追記　松岡委員のご逝去に際し、竹井委員に後任を依頼しました（令和 2 年 3 月末日まで）。学会一同松岡委員のこれまでのご貢献に感謝するとともに、ご冥福をおいのりいたします。）